

## 1-1 仕事の意義とは(その1)

### ■ 内容理解のヒント ■

この一節は、これまで数々の大学の入試問題で出題されている有名な部分です。果たしてラッセルは「仕事」の意義はどこにあると述べているのでしょうか？

### ■ 構造・読解のポイント ■

1. 第③文の **provided** はどのような意味・用法で用いられているのでしょうか。
2. 第⑦文の **sufficiently** という副詞はどのような使われ方をしているのでしょうか。
3. 第⑧文の **would have been** ～の部分はいわゆる仮定法ですが条件に相当する **if** 節が見当たりません。条件の部分はどこに表現されているのでしょうか。

① Whether work should be placed among the causes of happiness or among the causes of unhappiness may perhaps be regarded as a doubtful question. ② There is certainly much work which is exceedingly irksome, and an excess of work is always very painful. ③ I think, however, that, provided work is not excessive in amount, even the dullest work is to most people less painful than idleness. ④ There are in work all grades, from mere relief of tedium up to the profoundest delights, according to the nature of the work and the abilities of the worker. ⑤ Most of the work that most people have to do is not in itself interesting, but even such work has certain great advantages. ⑥ To begin with, it fills a good many hours of the day without the need of deciding what one shall do. ⑦ Most people, when they are left free to fill their own time according to their own choice are at a loss to think of anything sufficiently pleasant to be worth doing. ⑧ And whatever they decide on, they are troubled by the feeling that something else would have been pleasanter.

[Chapter 14: Work]

【語注】 ① place A among B AをBの一つとみなす、考える regard A as B AをBとみなす doubtful 疑わしい ② exceedingly あまりにも(= too much) irksome 厄介な an excess of 過度の～ ③ excessive 過度の dull 退屈な idleness 何もしないこと ④ grade 段階 relief 解消すること tedium 退屈 profound 深い、心からの delight 喜び according to ～にしたがって ⑤ in itself それ自体、本来 advantage 利点 ⑥ to begin with 第一に a good many かなり多くの ⑦ at a loss to do ～するのに途方に暮れて think of ～を思いつく sufficiently 十分に be worth ～に値する ⑧ decide on ～にする、～を選ぶ trouble ～を悩ませる

### ■ 味読のポイント ■

「過労死するような激務は別だが、いくらつまらない仕事でも、仕事がなければたいいてい人間は何をしてよいのかわからないのだから、ないよりましである」ということが述べられています。これは現代のような高齢化社会にとっては特に大きな問題です。例えば、これといった趣味を持たず仕事一筋で生きてきた人が定年退職した後に何をしたらいいのかわからなくなってしまう状態が本文の内容に相当するのではないのでしょうか。

### ■ 構文研究 ■

- ① 〈 **Whether** work should be placed among the causes of happiness or among the causes of unhappiness 〉 may perhaps be regarded as a doubtful question.

「仕事は幸福をもたらす原因の一つなのか、それとも、不幸をもたらす原因の一つとみなすべきなのかは、ひょっとすると簡単には答えの出ない問題であると考えてもよいかもしれない」

この文では **Whether** の導く節が名詞節として **may** 以下の述部の主語になっています：「〈…かどうか〉が～」。

**a doubtful question** はただ「疑わしい疑問」ととるだけではよくわかりません。これは「答えがあるかどうか疑わしい疑問」という意味で、結局は「はっきりと答え難い疑問、一概には答えられない問題」と解釈すべきです。

前置詞 **among** は「(三つ以上の) 集団の中にある」という意味ですが、転じて、「その集団の中に含まれるものの一つ」を意味することがあります。

【例】 Yokohama is **among** the largest cities in Japan.

「横浜は日本の大都市の一つである」

- ② There is **certainly** much work [ which is exceedingly irksome ] and an excess of work is always very painful.

「確かに、非常に面倒な仕事は多く、過度の労働は常につらいものである」

この文で用いられている **certainly** という副詞と次の第③文の逆接の副詞 **however** で、「確かに～だが、しかし…」という譲歩の構文を成しています。「譲歩」とは、自分の主張と異なる内容を一步譲って認めておいて、「だが、しかし」と逆接語の後で自分の主張を展開する形式です。

- ③ I think, **however**, that, **provided** work is not excessive in amount, even the dullest work is to most people less painful than idleness.

「しかしながら、思うに、仕事量が過剰でなければの話であるが、最もつまらない仕事でさえも、たいていの人にとっては何もしないでいることの方が苦痛である」

注意を要するのは **provided** です。直後の **work** を修飾する過去分詞 (の形容詞用法)、すなわち「供給された仕事」とするのは完全に間違いで、ここでの **provided** は接続詞に相当し、「(ただし) …であればだが」という条件の意味を表す用法です。次の例では **provided** の導く節が主節の後に来ています。

【例】 You can take photos here, **provided** you do not use a flash.

「写真撮影はかまいませんが、ただしフラッシュはご遠慮ください」

less painful than idleness の部分は、less + 原級 + than … 「…ほど～でない」という劣等比較の構文です。

- ④ There are in work all grades, from mere relief of tedium up to the profoundest delights, according to the nature of the work and the abilities of the worker.

「仕事の性質と労働者の能力によるが、仕事には単なる退屈凌ぎのものから、最も深い喜びを与えるものに至るまで、あらゆる段階のものがある」

from A up to B で「AからBに至るまで」の意味です。in work「仕事において」が前に繰り上がって挿入されたような形になっています。

- ⑤ Most of the work [ that most people have to do ] is not in itself interesting, but even such work has **certain great advantages**.

「たいていの人々がしなければならない仕事のほとんどは、それ自体は面白いものではないが、そのような仕事でさえも、ある大きな利点がある」

**certain great advantages** がどういうものかは、続く第⑥文以下で具体的に述べられています。

- ⑥ **To begin with**, it (= such work) fills a good many hours of the day without the need of deciding what one shall do.

「第一に、そうした仕事は人が何をするかを決めなくとも、一日のかなりの時間を埋めてくれる」

この第⑥文と続く第⑦文では、第⑤文の **certain great advantages** が具体的に説明されています。その利点とは結局「人は仕事があるおかげで一日の大半何をするかいちいち決めなくてもいい」ということです。

なお、**what one shall do**「何をするつもりか」では **shall** が用いられています (**one** は一般の人を表す **one** の用法です)。話者の意志を表すのにアメリカ英語では **will** で、イギリスでは **shall** を用いると教わった方もいらっしゃると思います。**shall** は本来、「見ざる力(神や運命など)によって、必然的に～することになる」という厳かな意味合いを持った助動詞です。そこからいわゆる「上から目線」的な含みも加わってきます。現在でも法律文書などで多用されます(日本語で言えば「～すべし」という感じでしょうか)。ちなみに **shall** を過去形にして婉曲的な意味を加えたのが **should** です。イギリス英語で **shall** が用いられるのは、イギリスが元々王国であるためで、一方、平等を原則とするアメリカでは **shall** より、あくまで個人の意思を表す **will** が好まれるという説もあります。実際、MacArthur 元帥の有名なセリフ “I shall return.” のように、アメリカ英語でも **shall** を用いることはありますが、今ではやや古めかしく厳粛な響きを伴います。

- ⑦ Most people, when they are left free to fill their own time according to their own choice, are at a loss to think of anything **sufficiently** pleasant to be worth doing.

「たいていの人々は、自分の好きなように自分の時間を埋めていいとなると、する価値のあるほど楽しいことを思いつぐのに、はたと困ってしまう」